

現代日本における「シャドウ・ワーク」の復権

——「グローバル恐慌」についての景気循環理論アプローチ——

武 井 博 之

新景気循環理論序説

I、実証研究「「グローバル恐慌」の解明とその人類史的課題」（第33巻第1号）

II、理論研究

1、「グローバル恐慌」についての景気循環論アプローチ（本号）

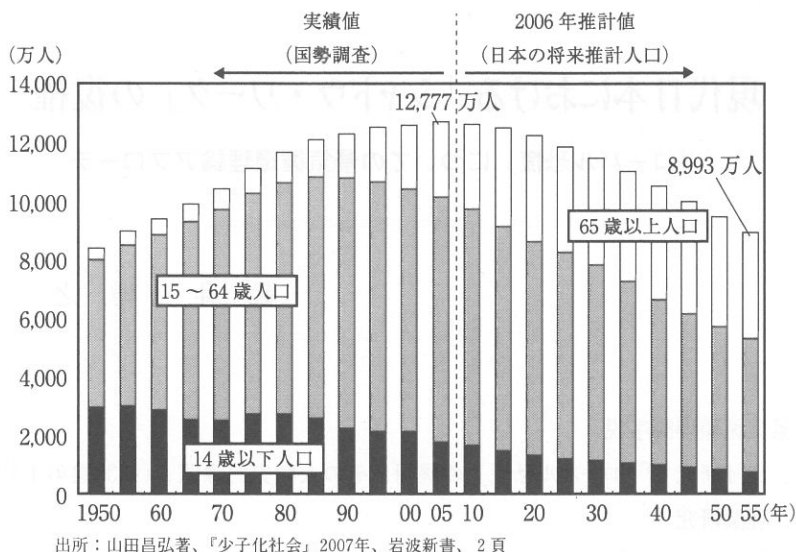
2、従来の景気循環論との相異（以下次号）

（1）問題提起——現代日本における「シャドウ・ワーク」

100歳以上の長寿者が、各地域で所在不明のまま放置されていることが、明るみに出た。100歳以上といえは、ロシア革命や日本の中国侵略の時代に青春を過ごし、子どもたちを戦争にとられた文字通り「戦争と革命」の20世紀を生きた人々である。彼らの労苦は、「特攻戦争」で生命を失われた戦死者以上の長くて深い年輪を形成してきたであろう。しかるに今回の報道である。

総人口の推移（図1）を見れば、働く15～65歳人口と働けない65歳以上の人口の乖離は急速である。かつてイギリスの産業革命がインドの木綿工を失業に追いやり、アッバス街道がその白骨でおおわれたというが、将来の日本でも、四国の遍路や、熊野古道に行き倒れの続出が「再現」されるかも知れない。

図1 総人口の推移



戦後65年、日本経済は、戦争放棄の憲法の下、高度経済成長を経て、三世代にわたって、平和で民主的な国民生活を築き上げることに一定程度成功した。しかし、1990年代、バブル崩壊後、社会主義体制の解体に勢いを得た新自由主義グローバル化の波によって、小泉政府は日本経済の「改革」の名のもとに、民営化をとりわけ雇用政策への逆流化（財界の意向に沿った）で日本の未来を担う若者に狡猾な罫を仕掛けた。一部専門業種の雇用形態の自由化というひと針が、今日若者さらには一般労働者の大量の「非正規雇用」（派遣、請負）形態へと発展、日本経済に深刻な赤信号を突きつけている。

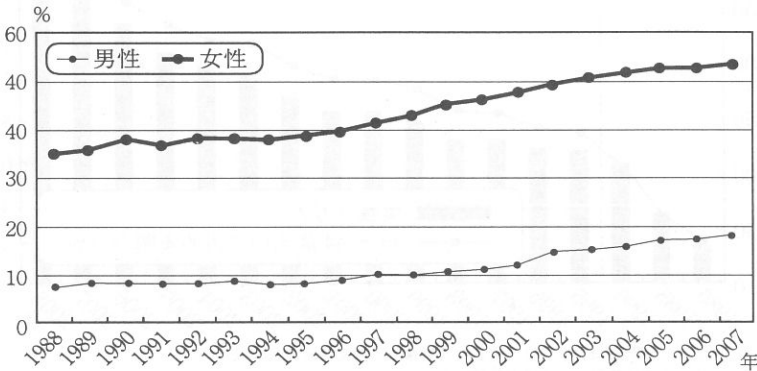
現政府は格差の発生を解決しようとせず、逆に格差の「富める」階層「能力もつ」集団化をはかり、国民に分裂をもちこみ、貧富の解消という、本来の政府の役割から逃げる。

大企業を中心とした資本家階級の意図は明白である。利潤率を上げるため、コストである人件費＝賃金を可能なかぎり極限まで引き下げ、世界市場での自動車、電器、IT等の輸出産業（その代表がトヨタ）がそのシェアをのぼし、「グローバル化」を回復、促進させ、他国の雇用形態を悪化させようという危

険な役割を果たしていると言わざるをえない（国際的には、少数の短期の「一時雇用」が普通で日本の形態はルール違反である）。

山田昌弘氏も指摘したように、2000年以降の「収入の不安定は、未婚化に直結」し、「若者の四分の一が結婚せず、四割は子どもをもたない」にもかかわらず「自立をせざるをえない低賃金労働者の出現」により先進国でも稀な「少子化社会」となるのである¹。

図2 非正規の職員・従業員比率の推移（男女別）



出所：2001年以前は総務庁「労働力調査特別調査」、2002年以降は総務省「労働力調査詳細集計」により作成。

注：「労働力調査特別調査」と「労働力調査詳細集計」とでは、調査方法、調査月などが相違することから、時系列比較には注意を要する。

出所：山田昌弘著「ワーキングプア時代」2009年、文藝春秋、37頁

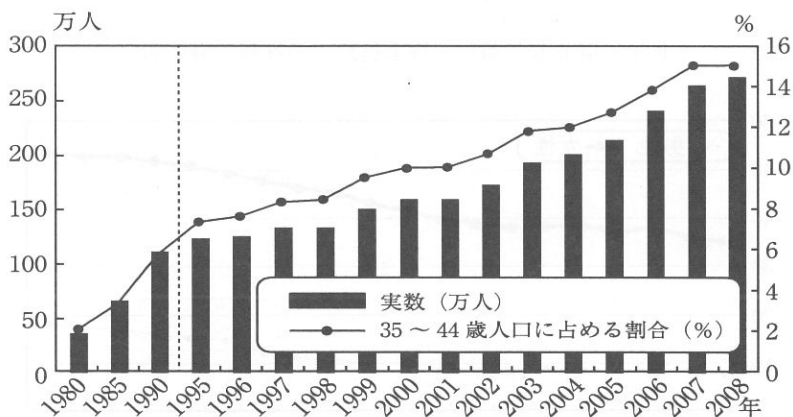
ホワイトカラーであれブルーカラーであれ、一定の賃金は保証されるが、社会保険も健康保険もない低賃金（20万円以下）の非正規従業員の場合は、悲劇的である。企業側は、正社員に登用通告せねばならぬ3年以上の雇用期間の直前に雇止めを断行し、間をおき再雇用契約をし、社会保障コストを削減することに血道をあげる。

低収入で不安定雇用にある若者にどのような結婚への道が開けようか？「できちゃった結婚」は極めて幸運なカップルと今では言える。まして、戦後の団

1 山田昌弘『少子化社会』2007年、岩波新書、13頁、41頁

塊世代の二世は、超氷河期の就職事情に加えて、財界主導の非正規労働職種拡張の追撃で、やもうえず、実家、親元へUターンせざるをえなくなっていくた。「親と同居の壮年未婚者（35歳－44歳）数」だけで、2008年には270万人。当該人口の14%を超える。（図3）

図3 親と同居の壮年未婚者（35－44歳）数の推移
全国（1980、1985、1990、1995-2008年）



出所：「労働力調査」より総務省統計研修所、西文彦研究官作成

注：上図は各年とも9月の数値である。

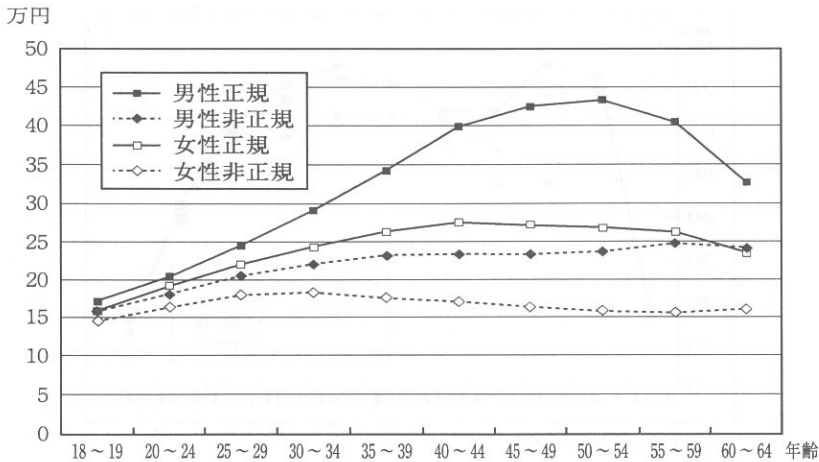
出所：前掲書、51頁

もし、帰る家がなければ、非正規社員は職場を求め、日本国中を転々とするか、大都市なら、ネットカフェ難民、それすら住居証明がなければ、炎天下であれ、寒冷下であれ、「ホームレス」とならざるをえない。将来の路上での行き倒れは、さらに大量となろう。

もちろん、非正規雇用の増大は、正規労働条件の賃金にも大きなインパクトを与えるし、企業も競争をねらっている。森岡孝二氏も「正規雇用と非正規雇用の境界もしだいに曖昧になり、同じ企業で働きながら、地域最低賃金のように地域別に賃金が異なる「エリア正社員」や、パートやアルバイトと同様に時間賃金で支払われる「時間給正社員」まで現れている。こうなると、正社員も安閑としてはいられない²⁾」と結論している。

2 森岡孝二『貧困化するホワイトカラー』2009年10月、筑摩書房、222頁

図4 就業形態別・年齢階級別賃金カーブ



出所：2007年「賃金構造基本統計調査」

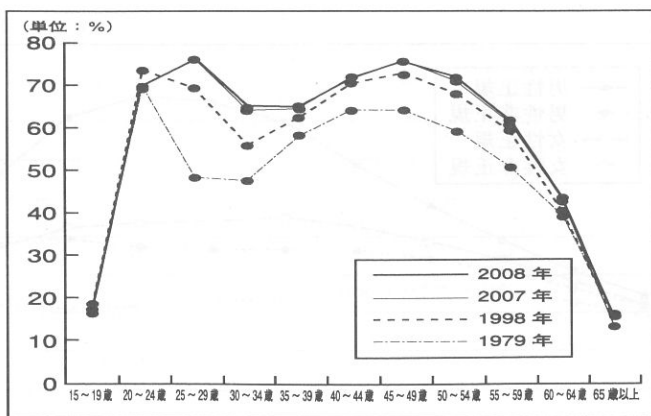
注：賃金は2007年6月分の所定内給与額

出所：森岡孝二著『貧困化するホワイトカラー』2009年10月、筑摩書房、222頁

家には誰が待っているのか？ それは女性、妻であり、母であり、また祖母かもしれないが、一家の団らんを夫や、父や祖父が担うことは稀であろう。

戦後の三世代にわたる家族の要になるのは、現在では、団塊世代の母と父であり、早い人では年金生活に入っている何の苦労もない優雅な夫婦もあろうが、大多数の団塊世代の（両）親多くの場合主婦は、家族の食事、洗濯、掃除等、祖父、母の介護や、新しく親となった子供達の孫の世話までしているかも知れない。いやそればかりか、昼はまだ働けるとパートで、職場を持つ母親（もちろん新婚の新婦も）はまだまだ多い。実はその新旧の主婦パートもまた、立派な、しかも最大の非正規雇用部分なのである。

図5 女性の年齢階級別労働力率



資料：総務省「労働力調査」

出所：本田一成著『主婦パート 最近の非正規雇用』2010年、集英社、11頁

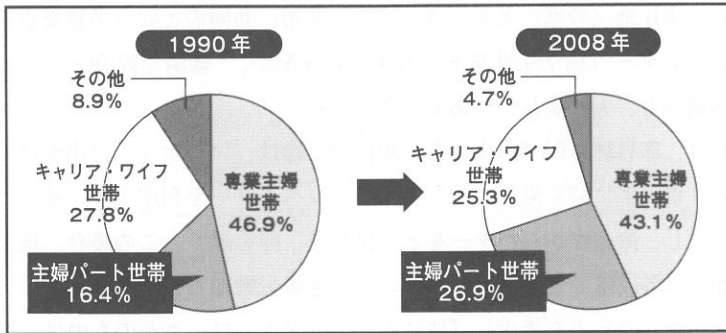
〈図5〉を見ていただければわかるように、日本女性の年齢階級別労働率は、M字カーブとなって、世界の女性雇用状態の良い国と異なり、結婚、出産等が「ハンディ」とされ、正規社員でも退社を余儀なくされ、育児が一段落してから、多くが別の会社にパート等の非正規労働にでもつくことから描かれるカーブである。

しかもこのカーブは、最近大幅に解消しだしている。がこの変化は、前半の上昇は、正社員としての就職ではなく、むしろ生活支援あるいは自立維持のための非正規雇用就労であろうし、後半の増加は、明らかに、夫の収入減等による家計支援のための主婦パートの増大を意味している。もちろん、中央の底上げは、一定の女性社員の固定化（退職せず、出産、育児制度を利用する等）の増加にもよるであろうが。

本田一成氏は「M字の谷が浅くなってきた理由として、従来に比べて正社員の結婚退職や出産退職が減ったことや、未婚女性が増えていることが、よく指摘されるが、早期パート就労」もその一つとしてもっと重要視されるべきではないか³と問題にしていた。

3 本田一成『主婦パート 最近の非正規雇用』2010年、集英社、12頁

図6 サラリーマン世帯における妻の就労状況別世帯構成



資料：総務省「労働力調査」（基本集計、年平均）。

注：サラリーマン世帯は、夫がフルタイムの雇用者、主婦パート世帯は妻が1週35時間未満の雇用者、キャリア・ワイフ世帯は妻が1週35時間以上の雇用者の世帯。

出所：本田一成著「主婦パート 最大の非正規雇用」（2010年、集英社）121頁

団塊世代の父親は、多くの場合、主たる収入源であり、あるいはほんの少し（1時間には満たない）育児・家事を手伝うこともあるが、ほとんどの家事労働の担い手は、母親の役割であった。主婦でありながら、パートタイマーとして労働者でもありつつある、これが妻の姿で日常生活である。それは一見、母親を中心とした家族全員での相互扶助の集団の場、小さな共同社会、平等なつくしみ合い、働らき分かち合ういわば日常生活の「共産主義」の断片と見えよう。

サラリーマン世帯でなく、自営業や、農業経営家の場合には女性の仕事は、自らの家庭の中にあり、自らの家庭の場が同時に労働の場でもあったのである。このような家庭内で女性のおかれた位置あるいはその活動、育児を中心とした家事労働は、古代から少なくとも家族という地縁集団が発生してきて数千年あまり大きな変動をこうむることはなかった。

「おばあさんは、鶏小屋で卵を見つけてきて、自家製のラードのかたまりからひとつとると、子供たちが共有地（コモンズ）から集めてきた薪に火をつける、そして買ってあった塩をふりかけるだろう」と卵料理の例をもってきて、私のいう日常、生活の共同作業としての家事労働を、「ヴァナキュラーなジェンダー」の諸行為と呼んだのが、I.イリイチであった⁴。だが、イリイチは続

けて、資本主義社会の発展と共に、ヴァナキュラーな（この語源は、根をおろすとか、居住地（の家）とか、さらには、共用、共同のという多様な意味をもつ）ジェンダー（様々な性をあらわす）の支配が、「経済を媒介とするセックスの体制へと、大転換しつつある」という。

それは、卵料理の例で示すなら「現代の主婦は、マーケットに出かけて卵を手に入れ車で家に持ち帰って、七階までエレベーターを利用する。そしてコンロに点火し、冷蔵庫からバターをとり出して、卵を焼く。この場合、彼女は問題の商品に各段階で価値を付加している」家事労働即ち、本題にある「シャドウ・ワーク」の仕方を指す⁵。（彼によるシャドウ・ワークそのものは、男女にかかわらず通勤なども含むが、本稿では婦人の育児を中心とした家事労働のあり方だけを問うことにする。）

資本主義的生産による大量の商品は、従来家族、地域と結びついた女性としての共同の仕事 Work を、ただ商品を加工するのみの家庭内の内実のない労働、Labour に転化させてしまったこと、をイリイチは憂うのである。

彼のシャドウ・ワーク論の意義は、女性の種々の家事労働全体が、資本制により完全に社会の外部に投げ出され影法師のような従属的活動に、転化したあるいはそう見なされる状態にあると解明した点にある。

「シャドウ・ワークというのは、財やサービスの生産とちがって、商品の消費者によって、とくに消費的な世界でなされるものである。私がシャドウ・ワークと呼んでいるものは、消費者が、買い入れた商品を使用可能な財に転換する労働のことである。買い入れた商品に、それが使用に適するようになる価値を付加するために支出されねばならぬ時間、煩勞、努力を、シャドウ・ワークと名づけるのである。⁶」

そして彼は、現代において家事労働する女性を「無償のしごとをなすための家庭という避難所を必要とする、男性の美しき所有物、その忠実な支えとなった⁷」と言い切る。

4 I.イリイチ、玉野井芳郎、栗原彬訳『ジェンダー』1984年、岩波書店、94頁、2頁

5 同上、94頁

6 同上

だが、その後の世界の、少なくとも日本の女性の実情とその役割を考えると、もはや、単なる商品を活用するシャドウ・ワークだけでなく、新たな家事労働、介護ケア、育児、教育という肉体的・精神的に高度な統一とバランスをもった複雑かつ具体的な労働・ワークが求められていることである。これらのシャドウ・ワークは、もはや、影法師的な存在ではなく、輝く陽の下での創造的な人間活動として再評価、復権されねばならないだろう。

このことは、また本田氏の著書によれば、厚生労働省の調査結果に明らかである。「厚生労働省平成12年介護サービス世帯調査」によると、介護者は女性に著しく偏っていることがわかる。介護している家族は、妻が20.8%、娘が19.0%、男子の嫁が27.7%などで、およそ7割が女性なのだ。⁸

女性のシャドウ・ワークは、今や、家族そして国民経済を支えるサンシャイン、テダ（太陽）ワークへと視座の革命的転換が不可欠である。

(2) 「女性原理」の探究 —— マルクスからモーガン そしてエンゲルスへ

老境に入る私達団塊世代は「元始、女性は太陽だった」という平塚らいてうの言葉に象徴されるように、文明5000年以上も前の大昔に母系中心の原始共産制社会があったことをF.エンゲルスの『家族・私有財産及び国家の起源』を読んで知っていた。だが母性とは、女性とは一体何なのか？ どんな人間なのか男性として考えさせられる今日となった。

20世紀後半を生きた私達は、マルクスやエンゲルスの「マルクス・レーニン主義」や「科学的社会主義」の名のもとに1917年にロシア革命を実現しそしてまた戦後社会主義体制が1990年代から崩壊してきたことを見てきた。だが何故、あらゆる学問の精華を摂取して社会的実践に生かすことのできるはずの「マルクス主義者」達は、資本主義社会の成熟にもかかわらず、真の社会主義、共産主義社会を打ち建てられないのであろうか？ 私達は、資本主義経済法則とし

7 同上、207頁

8 本田一成 前掲書、114頁

での利潤率低下法則の妥当性や実際の帰結としての恐慌の必然性も最新のグローバル恐慌で明瞭となったことで、資本家階級の御用経済学とは異質の、壮大な学問体系の有効性を改めて実証できたのではあるが。

そしてまた、私達は、個々に原始共産制社会→階級性社会→高次共産主義社会という三段階の弁証法的歴史観を抱き、高度成長の日本資本主義経済における階級闘争の中で、新しい男女平等の社会をめざし、家庭を形成し、子供を養育し、孫の守りをするようになりつつあるが、他方で、上述のように現代日本の国家的崩壊を招きかねないような家族解体の危機に直面している。

このような新しい資本主義の「全般的危機」は、日本に限らず、福祉のあらゆる面で先進国のスウェーデンにもなおかつ深刻な課題をつきつけている。

図7 公平性の各国比較

	アメリカ	フランス	スウェーデン	日本
男女間収入格差 a) (2006年)	0.62	0.64	0.81	0.44
男女間収入格差 b) (2006年)	81%	79%	87%	65%
女性就業率 (2006年)	60%	48%	59%	49%

出所：OECD.Stat.

注：a) 女性の平均賃金÷男性の平均勤労所得、b) 女性就業率÷男性就業率

出所：中西基著「スウェーデンの労働政策」

(北欧労働・教育・事情視察のためのワーキングペーパーより、2010年3月)

OECD 調査の「公平性の各国比較」では「男女間収入格差」が段突で、100%ではないが日本よりも2倍も高い。ただ、「女性就業率」がフランスよりも高いことから、女性の自殺率がフランスよりも、相対的に（男性のそれと比較して）高くなるのは理解できるが、スウェーデン人男性の50%以上の自殺率というのは、他の諸国と比較すれば、異常に高いスウェーデン人女性の自殺率だと言わざるをえない。男女公平化が、女性の自殺率を高めるとすれば、女性の労

苦は、決して資本主義体制下では解決されえない課題であることを示しているように見えてならない。

図8 幸福度・自殺度の各国比較

	アメリカ	フランス	スウェーデン	日本
生活への満足度の平均値 (2005年 or 2006年)	7.3	6.9	7.7	7.0
幸福でないと答えた人の割合 (2005年 or 2006年)	6.80%	9.50%	3.70%	10.30%
10万人当たり自殺率 (2005年)				
男性	17.7人	26.4人	18.7人	36.1人
女性	4.5人	9.2人	8.4人	12.9人

出所：「生活への満足度の平均値」と「幸福でないと答えた人の割合」は世界価値観調査 (World Values Surveys)、「10万人当たりの自殺率」はWHO から作成。

出所：図7と同じ。

論証にはならないが、図を掲載させていただいた中西弁護士らと「北欧観察ツアー」を計画された有村とし子弁護士から次のような御返答をいただいた。「ホワイトカラーの人々の労働組合 (ユニオン) で活動されている女性弁護士の方によれば、スウェーデンでは女性の社会進出が進んでおり、働く女性が仕事と家庭生活の両立に悩むことが多いのではないかとのことでした。」と。

ここでスウェーデンを持ち出したのは、男女平等的労働政策の推進力となったのが、社会民主党系の社会民主労働党 (SAP) であり、旧共産党系の左翼党でないことに注意を向けたいためである⁹。

世界中の女性の塗炭の苦しみからの解放について、改めてマルクスやエンゲルスの考え方を考察し、彼らの歴史的社會観、経済理論そして革命論と、原始および現代の女性問題とどのように関連しているのかを尋ねてみたい。

私達がマルクスを学ぶものとして、女性との接し方について、感動をもって

9 柴山健太郎編著『グローバル経済とIT革命』2000年、社会評論社、135頁

教えられたところは、マルクスが26才頃、妻イエンニーと結婚し、パリに新居をもった時期に書かれた1844年の『経済学・哲学手稿』の次の文章である。

「人間の人間に対する直接的、自然的必然的な関係は、男の女にたいする関係である。……したがってこの関係から、人間の全教養程度が判定される。この関係の性格から、どれほどまで人間が類的人間として、人間として、おのれに成っており、かつおのれを把握しているか、ということが結論される。」『手稿』全体に言及などできないが、第三手稿の私的所有と共産主義について（1～7項）「(6) ヘーゲル弁証法および哲学一般の批判」の直前の(5)の冒頭で、彼独特の存在論いわば人間論さらにいうなら男性論が展開されている。「存在者は、自分が一本立ちであるばあいに初めて自分を自立的と思うのであり、自分の現存在を自分自身に負うときはじめて一本立ちである。他人の意志によって生きてゆく人間は、自分を依存的な存在と見なす。ところで、もし私が私の生活の扶養を他人に負っているばかりでなく、彼はなおそのうえ私の生活を創造したのだとすれば、つまり彼が私の生活の源泉であるとすれば、それは必然的にそのような根拠を自分の外に持っているというわけである。¹⁰⁾

すぐ後で、マルクスが「だれがおれの父を生んだのか、だれがおれの父の祖父を生んだのか¹¹⁾」という奇妙な言い回しをし、素朴に「母、祖母を生んだ」と言わなかった理由（話の先がゼウス神であり、議論する相手も男であったからであろうが）はともかく、不自然な表現ともとれる（マルクスは母と「対立」したからかも¹²⁾）が同様に上述においても厳格な人格論だが、極めてヘーゲルの絶対的精神を転倒させた直後の独立的リゴリズム（抽象的＝無性的人間）が支配的で、他者との依存、共調、共同等のいわゆる社会的交通を従属的、不完全な契機とみなしている。見方を移せば子供が大人になるには、まず母親が私の「源泉」（つまり生み）であり、私の成長を「創造」（つまり保育）し母親の「恩恵」があればこそ「一本立ち」できるのである。だから、私は母のうちにあり、何よりも私の自然的な、感覚的「根拠」を形成するのである。若きマル

10 同上、159頁

11 同上、160頁

12 奥村宏『経済学は死んだのか』2010年、平凡社、46頁

クスは、尊敬する「父」を継承発展させえたが、まだ「母」の献身的な無限の愛と身体とその発育を無条件な、受動的な、所与の存在条件、自然環境と同視し、彼自身が「父と母」の様々な相互活動の新しい所産とは、考えられなかった、ということにならないだろうか？ マルクスを生んだのは母である。

だから「婦人が略奪物であり、また共同の肉欲の下婢であるような、婦人にたいする関係のうちに、人間がおのれ自身にとって現実にそのなかに存在している無限な墮落が表わされている¹³」と。

ここではマルクスは人間の両性の平等な関係を前提とし、その男性の人間たるゆえんを他方の性によって試されると述べてその両性間の関係を重視している。ただ後の文で「人間がおのれ自身にとって」という時、その人間が男性であり、その男性自身の反省材料としてしか女性が考察されていず、人間同士の共同の相互作用としての男女関係が、つまり人間関係として展開されているとは断定できないことである。

『手稿』で気になる箇所をもう一つ。「……君は君の父と母によって生まれた、だから君において二人の人間の交接が、つまり人間の類的行為が人間を生産したわけである……この運動によって人間は生殖において、自己自身をくりかえすのであり、したがって人間が依然として主体であるのだ¹⁴」。当時のマルクスは、われ＝人間＝男としてとのみで、出産や育児をまだ体験していなかったのか、人間の再生産を、動物的な「生殖」でのみ成立すると考えているように見える。若きマルクスにとって、人間を再生産するのに類的、意識的行為としての生殖、交接が不可欠であるという男性的見地からのみで、それを支え、育み、教える多様な母親の活動を捨象ないしは、二次的なものとして、議論を哲学的にダイナミックに組み立てているように思えるのだ。現実存在（自然）と主体である類的存在（人間）の間の対立あるいは疎外とその「交接」一致として、止揚として進化論的、いや弁証法的に発展的社會関係を展開しようとしていたのであるが¹⁵。「こうして社会は、人間と自然との完璧な本質一体性であり、

13 マルクス『経済学・哲学手稿』藤野歩訳、1963年、大月書店、144頁

14 同上、160頁

15 同上、148頁参照

自然の真の復活であり貫徹される、人間の自然主義と、貫徹されたる、自然のヒューマニズムである¹⁶」。

子供が一人で大きくなったと言う時、母は微笑するだけだろうが、彼はその母に「疎外」されたと思うのだろうか？ マルクスを生んだのは母である。わが師はヘーゲルという時、マルクスもまた「疎外」された人間であったことは確かであろう。ただ彼はそれとの、特に経済的階級闘争とその弁証法的法則を解明した。しかし後述するように彼の家族概念もまたヘーゲルのそれと変わらない。それゆえ、ヘーゲルへの「ジェンダー形而上学批判」などから、マルクスとヘーゲルの関係が解明されるべきであろう¹⁷。

次は『資本論』からの引用を1つ。「資本主義の中での古い家族制度の崩壊がどんなに恐ろしくいとわしくみえようとも、大工業は、家事の領域のかなたにある社会的に組織された生産過程で婦人や男女の少年や子供に決定的な役割を割り当てることによって、家族や両性関係のより高い形態のための新しい経済的基礎をつくりだすのである。¹⁸」

この文章をどう読みとくか？

『啓蒙書』的だが、マルクス主義者の立場からの『ジェンダーと史的唯物論』(鯉坂真編著2005年、学習の友社)という本をいただいたが、そこで二人の論者の当該箇所についての、非常に興味深い意見が見られた。両者は、マルクスが「女は家庭」という男性中心型の性別役割意識をもっている、と批判するフェミニズムに対する反論として、同箇所の婦人等の決定的な役割を、女性の社会進出、生産過程での女性労働の積極的意義とそのための「仕組み」として労働時短を追求するものと実践的に理解する。

経済学者石川康宏氏は、「女性が「家事の領域」への束縛から抜け出し、社会的な生産の過程に入り込むことは家族関係の新たな改革の物的準備となるものである¹⁹」と現実の企業社会への実践的意義を説かれ、哲学者牧野広義氏は、

16 同上、148頁

17 大越・志水編訳『ジェンダー化する哲学』2003年、昭和堂、245頁

18 (マルクス、『資本論』、大内兵衛、細川嘉六監訳、マルクス＝エンゲルス全集第23巻、第一分冊、大月書店、635頁、原書、S. 514

19 同上、59頁

さらに「婦人労働と労働力再生産とを両立させる仕組みをつくること²⁰」を強調される。

確かに、現代日本の女性労働の現状は、主婦パートに見られたように、その全面的社会進出に至っていない。その限りで、両氏のように現実の実践的課題としてマルクスの同文章を理解することは可能であり、大変有効であるともいえよう。

しかしながら、エンゲルスが同箇所を「ユートピア社会主義者」を引き合いに出し、婦人らの役割が「人間が自由社会的結合をつく」った未来のそれであると説明しているように、(社会変革を女性解放に優先しようとする批判するフェミニストを批判するとき、)両者は問題の未来と現実を取り違えていることは確かであろう。

細かいことをいえば、もし「子供」も短時間でも生産過程で「労働」させるのが現代の決定的役割だとすれば、同箇所の3頁ほど前で、マルクスが職業学校で「ある程度の教育を受ける」子供を大工業の下に想定し、さらに「労働者階級による不可避的な政権獲得は理論的および実地的な技術教育のためにも労働者学校のなかにその席を取ってやるであろうことである²¹」と述べている。

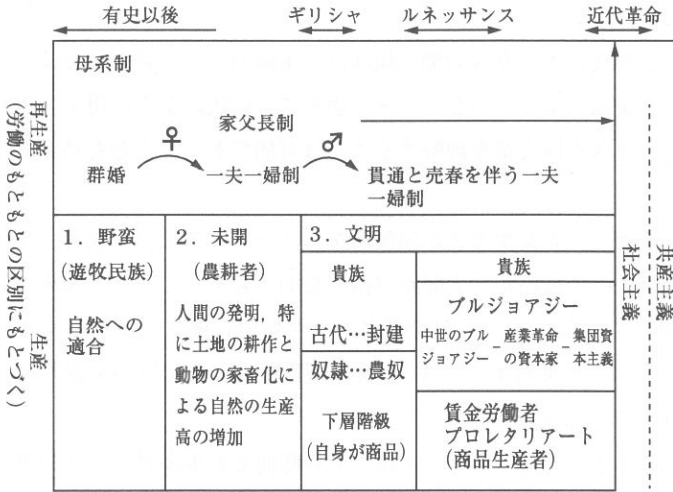
上の問題設定はマルクスやエンゲルスにあっては、明らかに、少なくとも当時としてはだが、基本的には社会変革があつての女性解放であり、子供や若者の教育であるという逆行のない連動するあるいは統一的共産主義革命論者であつたのではないか、ということである。

マルクスの青年期の、人間に関する思索の若干の問題点および、資本論における婦人らの役割についての問題点をあぶり出そうとしたにすぎないが、次の本題のモーガンの著作『古代社会』(1877年)をめぐるエンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』(以下『起源』と略記)(1884年)とマルクス『資本論』(1867年)等との相互関係、体系上の不整合、視座の相違あるいはズレの有無等について分析し、できればそれらの主体と諸条件を整合的に、統一的に理解するための中心カテゴリー「女性原理」のようなものを探究していこう。

20 同上、92頁

21 マルクス、『資本論』、前掲書、634～5頁、S. 512

図9



エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』の中の二つの制度の相互発展の相関関係を年表の上を示すと上のようになる。

出所：S. ファイアストーン著、林弘子訳、『性の弁証法』昭和55年、評論社、21頁。

まず、エンゲルスの『起源』について。

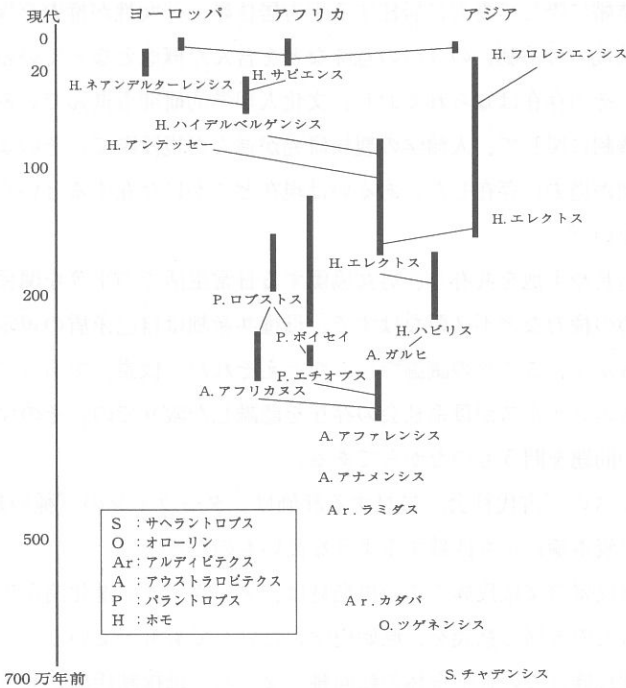
『起源』は、階級社会以前に問題を絞ってみると、人類初期の歴史を幼年期とし、モーガンの分類に沿って単純な命名だが、野蛮と未開そして文明に3分割し、数千年の人類発展の展開を追尾する(たとえば、C・レヴィ＝ストロースの見解では、「科学的思考には二つの様式が区別される。それらは人間精神の発達段階の違いに対応するものではなくて、科学的認識が自然を攻略する際の作戦上のレベルの違いに応ずるもので、一方はおおよそのところの知覚および想像力のレベルにねらいをつけ、他方はそれをはずしているのである²²」。

放浪生活の先史前期(旧石器時代)において、火の発見、利用から魚類も料理できるようになり、さらに次の時代(新石器時代)の弓矢の発見により前期(野蛮)を脱け出、やがて、土器等の製作の成功から家畜(私有財産の起源)の飼育そしてさらに灌漑による穀物栽培で定住生活が可能となり、鉄器文明へと飛躍的に発展したとし、その間の人間(親族)関係は生活の共産主義といわ

22 橋保夫訳『野生の思考』1976年、みすず書房、20頁

れる母系氏族社会を構成し、そこでは群婚にはじまる血族家族、プナルア家族、そして対偶婚家族をへて、女性原理は「敗北」し、一夫一婦性が確立した、という概観になる。

図10 化石人類の系統的なつながり



出所：山極泰一『人はどのようにしてつくれたか』183頁

その後人類学知見からは、たとえば、猿から人類への歩みには五百万年かかり、しかも人類種も多様で、唯一現世人類ホモ・サビエンスがアフリカで誕生した最初の母の「ミトコンドリア・イブ」ですら七万年以前にさかのぼられ、エンゲルスのいう先史すら、その年月は10倍以上の永きにわたることが実証されている。

1884年発刊の『起源』の再検討の必要は言うまでもないが、エンゲルスがモーガンの『古代社会』（1877年）から学んだ最大の事実は、「母権制氏族」（エン

ゲルス『起源』²³であった。

もちろん「母権制」に対しても「幻想」²⁴と否定的見解が多い。しかしそれでも一定の母系共産制社会が存在していたこと自体は確証されている。

「母権制」(Matriarchy) という概念は、このような文脈で誕生したが、そこには多義的な意味が含まれていた。①女性を通じて出自が与えられている母系制、②結婚に際して妻方に居住する妻方居住婚、③女性が権力を握るという意味での狭義の母系制、の3つの意味などを含んだ概念となっている。①と②に関して、その存在は知られており、文化人類学的研究も進んでいるが、③の狭義の母権制に関して、人類学の親族研究が進んだ現段階で、そのような意味での母権制が過去に存在した、あるいは現在どこかに存在するという確証は得られていない。²⁵

本来、道具や土地を共有し、男女協働する日常生活での平等な関係において、支配のための権力など不必要なはずで、母権共産制は自己矛盾の規定であるが、それはともかく、ここでの議論では、たとえそれが「仮説」であってもよい。少なくともエンゲルスが母系社会の存在を認識した限りでの、そのマルクス理論体系との問題を問うものだからである。

エンゲルスの『古代社会』に対する評価は、ダーウィンの『種の起源』、マルクスの『資本論』にも匹敵するような高いものだった。

「文化諸民属の父権氏族のこの再発見は、ダーウィンの進化論が生物学にたいしてもったのと同じ意義を、原始史学にたいしてももっている。……母系制氏族はこの科学全体の転回軸となった。母権制氏族が発見されてからは、どの方向に、またなにを求めて研究したらよいか、そして研究してえた成果をどう分類したらよいか、だれにもわかっている。そこで、いまこの分野では、モーガンの著書が出る前とはうってかわった急速な進歩がなされた。²⁶」

23 「第四版序文」マルクス＝エンゲルス全集、第21巻、大月書店、(前掲 訳、486頁、S. 481

24 山本真鳥「ジェンダー研究と文化人類学」井上・上野・江原編『フェミニズム理論』1994年、岩波書店、127頁

25 同上、126頁～7頁

『古代社会』をエンゲルスに話したのは、マルクスであり、既にマルクスは、1880年～1年（60～1歳）頃同書の「摘要」をとっており、同書を訳し、「できれば」「この本にはふたたび立ちかえり」「たかったことはたしか²⁷」だが、果たせず、2年後65歳で死ぬ。

そして、マルクスの遺志をどう受けついだかは不明だが、一年後、エンゲルスが『起源』にこぎつけたのであった。

その執筆中に持っていた問題意識は、次のようなことであると、教え子の一人に手紙で語っている。「この仕事はわれわれの見解全体にとって特別な重要性を持つだろうと、僕は思う。モーガンがその先史時代史によって、従来欠けていた歴史的基礎をわれわれに与えてくれたので、われわれはまったく新しい視点を提出することが可能になっている。……だから、この仕事を真剣に仕上げ、よく考えぬき、その全連関のうちにおいて見る必要があると、それとともに……²⁸」。

マルクスからの遺言だったかどうかは別として、このエンゲルスの『起源』書き上げ前の意気込み、志は、極めて高次というより重大な意味を帯びているように思えてならない。モーガンの母系共産制社会の発見は、単に事実の「新成果」とどまらず、「まったく新しい視点を提出」し、歴史の「全関連のうち」で「考え抜く」ことで、マルクス&エンゲルスの「見解全体にとって特別な重要性をもつ」とエンゲルスは、母系氏族社会が人類前史の出発点であるという事実が、マルクス（主義的）歴史観、社会観全体を塗り変えるような新視角となる契機を考えた、といえよう。

猿から人類への進化の新事実とは、人類は（高等）動物とは異なり、家族をまったく知らなかったか、またはせいぜい動物には見られないような家族しか知られなかった²⁹」ので、「個体に欠けている防御力を群れの結合した力と共

26 エンゲルス、前掲書、486頁、S. 481

27 「エンゲルスからカール・カウツキーへ ロンドン84年2月16日」前掲書、『第36巻』99～100頁、S. 110

28 「エンゲルスからカール・カウツキーへ ロンドン84年5月26日」前掲書、128頁、S. 142

29 『起源』前掲書、40頁、S. 41

同作業とて補うこと³⁰」、これである。人類を人間を個人から出発するのではなく、本来的に社会的個人つまり一定の集団としての共同生活の確定こそが、類人猿から進化させた最大要因だということである。

では、人類集団形成の具体的な最初の人間関係は、本来パワーもエネルギーもある男性でなくなぜ女性なのか？ これについて、エンゲルスは「集団婚家族のどの形態でも、子どもの父がだれであるかはたしかではないが、その母がだれであるかは確かである。たとえ彼女が全家族中のすべての子供を自分の子どもとよび、彼らにたいして母としての義務を負っているにしても、彼女にはやはり血をわけた自分の子どもは他の者から見わけがつく。だから、集団婚が存在するかぎり、出自が母方についてしか立証できず、したがって女系だけが承認されるのは明らかである。じじつ、これは、野蠻民属と未開の低段階に属する民属とのすべてに見られることである。³¹」

乱婚、群婚、無差別婚と、単に事のはじめの？セックスの形態に重きを置くのではなく、あるいは単に出自の集団的「承認」が重要なのではなく、大雑把で恐縮だが、人類が比較的安全な樹上生活から何の生物的進化の「武器」ももたず、危険極まりない地上生活に歩み出、手で労働（共同作業で）を学習（頭脳の発達）し、様々な難題を克服していった最大の難関は何かということである。

それは、婚姻や出自の問題ではない。それは、エンゲルス自身、『起源』の初版序文で陳述しているように、「直接の生命の生産と再生産³²」である。「一方で」の「生活資料の生産」であり他方では「人間そのものの生産すなわち種の繁殖」が、「歴史を究極において規定する要因」と見る「唯物論的な見解」にある。厳密には「種の繁殖」とは、いささか生物的で、実際には、子供の出産およびその養育こそ人間の再生産に値するものであり、その限りでは、女性を母胎としたつまり基礎とした人間の再生産が、女性原理と呼べる（男性にない人類再生産上の役割を抽象的に定式化して）人間活動自体である。

何千万年前の猿における雌雄の個体差は、三分の二対一であったが、7万年

30 同上

31 同上、47頁、S. 47~8

32 同上、47頁、S. 27

ごろのミトコンドリアイブでの同一化まで何という長年月をかけたことであろうか。二本足歩行は骨盤の発達に支障をきたし、頭の発達が進めば進むほど、骨盤との矛盾は拡大、一層の出産の困難が発生しやすくなる。また、子供は生まれたとしても、生物的に早産であり、安全な育児のための空間と時間が、進化と共に長期化する傾向があった。

だから、ネアンデルタール人のようにたとえ頑強で、素晴らしいハンターであっても、さらに生活資料の確保、再生産がいかに潤沢であろうと、女性原理がその集団に貫かれるようにならなくては、滅亡するのである。旧人類の墓では、男性より女性の人骨が少ないことは良く知られているようであるが、男性に負けない女性の体力と出産・育児の能力を身につけるためには、出自をきっかけとした、女性集団の連帯と、コミュニケーション（言語の発達）が決定的に重要な存亡の課題とならざるをえないのだ。実は、現ホモ・サピエンスのみが生き残れたのは、この女性原理を男性も「承認」し、その集団全体の形成された女性尊重のシステムこそ、「母系氏族社会」＝原始共産制社会の賜と言えるのではないだろうか。

「いかにも子どもらしく単純であるにもかかわらず、この氏族制度は、なんと驚くべき制度であろう！兵士も憲兵も警察官もなく、貴族も国王も総督も知事も裁判官もなく、監獄もなく、訴訟もなく、それでいて万事がきちんとはこぶ。喧嘩や争いはすべて関係者の全体、すなわち氏族または部族によって解決されるか、あるいは個々の用いられる手段として、血の復讐の威嚇があるだけである。……共同の事務は今日よりずっと多いけれども一世帯はいくつかの家族の共同で、共産主義的であり、土地は部族の所有でさしあたって小さな園圃が各所帯にわりあてられているにすぎない―、現代の広範複雑な行政機構の一片さえも必要でない。決定するのは当事者たちであり、たいていの場合、何百年来の慣習によってすでに万事がまわっている。貧乏人や困窮者は存在しようがない。―共産主義的世帯と氏族は、老人や成人や戦争不具者にたいする自分たちの義務をわきまえている。万人が平等で自由であり、一女もまたそうである。³³」

33 『起源』前掲書、94頁、S. 95～6

何故、このような生活資料も現状から見て余りにも質素だと想像できる数10人、数100人、数1000人規模の集団社会で、「万人が平等で自由な」社会が形成されたのであろうか？ もちろん、食物は子供や負傷者や母、女性に優先し、道具も、皆んなが、使えるよう集団所有であり、私的所有いや、所有という観念すらない、いわゆる原始共産制社会であったからであろう。しかし、大切なのはおそらく共産「主義」社会でなく、自然に共同「財産」制に、つまり一人のものはみんなのものという集団の構成員が、一つの目的のために全員が協力、協働し協議し一致団結して難問を一つ一つ解決していく中で長い時間をかけて少しずつ民主的に社会化制度化、されていたことの結果にすぎないだろう。

その目的、課題は何か、言わずと知れた、安定した後継者の生育によるその人間氏族の持続的発展、成長である。考えてみれば、子供を一人育てるにも10月10日の母体の安全が絶対であり、産前産後2か月の住居は不可欠であり、その後の保成を考えると、とても放浪生活では例外的にしかそのような好環境に遭遇することは至難の技であったし、長期の「妻」の食料を保存できるようになるまで（たとえ夫がいくら有能なハンターであっても優秀な道具をもっていても1年にわたる「家族」の（全）食料を入手し続けるのは不可能であろう）、一苦労どころではない。そこで仲間の集団形成がどれほど有難いものか、認識したのである。500万年の最後の10万年足らずの時にやっと、ほぼ男女平等に近い身体能力をもった、DNAをもつミトコンドリア・イブが誕生し、他の「猿」人達（猿から労働しつつある人間に向かったホモ属）の諸集団とは異なった女性の諸活動、採集から、栽培つまり子供を育てるように作物を植え、育成し、収穫するというあらたな創造労働が組織的に可能となり厳しい自然環境を乗り越える唯一のホモ属となったのであろう。

その集団では、出自もその契機であったにしても、「子は神からの授かり物」、誰の子であれ、生命とその起源を大切にす原理が、狩猟中心の捕獲労働の男性にも浸透、承認させられて強固な共産制氏族社会が形成されていった。その経済的過程は、決して文化的にも精神的にも貧困ではなく、日本のアイヌ・ユーカラのように女性による言語およびその物語の紡ぎ手として、また彫刻（女性像）、絵画（スペイン・ビコルプの女性の洞窟画）の被対象性に見られるように、

それぞれの時代の男女協働生活自体の豊饒さ、文化的、芸術的高揚として結実していた。それらは、ピカソも驚嘆させ開眼させた「芸術作品」群だった、という。

「ヒトの乳幼児は、母親に世話をされる期間が他の動物よりも長くなったが、それによって母と子の結びつきはいっそう強まり、……密接な社会的つながりをもたらすことになったのだろう。母子間の最初の絆は、一緒に育った姉妹、兄弟間の同胞的なつながりによって、さらに補強されたに違いない。年上の子は、親から勧められ、社会化されて、しつけ、食物の分け合い、遊び、弟妹の手助けを含め年下の同胞の世話に力を貸しただろう。そうした群れで中心になるのは、しばしば言われているように、どんなオスよりも母親であるのは明らかだ。そればかりか、この群れの行動は、広い意味の種内だけでなくオスの間の親睦をも強めるようになっただろう。域内で集まった和やかな結びつきをさらに推し進める点でも、(農耕の発見となった栽培労働の一武井) 技術の改良点を長い養育期間に教える最初の教師としても、メスの果たした役割をしっかりと認識すべきである。³⁴」

(3) マルクス「男性原理」における矛盾——母系共産社会と家族

既に『起源』において、エンゲルスもまたモーガンによりアメリカの女系氏族イロクオイ属に対する最大級の賛辞を贈ったことは、見た。

しかるに、奇妙にも全く正反対とも言える評価を他の「側面」として次のように下すのであった。

「これが、一つの側面である。しかし、われわれは、この組織が没落する運命にあったことを忘れないようにしよう。それは部族以上にはすまなかつた。……われわれがアメリカで見たような、全盛期における氏族制度は、きわめて未発達な生産を、したがって、広大な領域における極めて希薄な人口を前提す

34 M. エーレンバーグ著、河合信和訳『先史時代の女性』1997年、河出書房新社、73頁

る。だから、それは、外的なものとして人間に、対立する不可解な外部の自然によって、人間がほとんど完全に支配されている状態を前提する。この状態は、彼の子どもらしい宗教的観念に反映している。部族は人間にとって、族外者にたいする限界であるとともに、自分自身にたいする限界でもあった。部族、氏族、およびその諸制度は、神聖でおかすべからざるものであり、個々人は、感情や、思考や、行為の上で無条件にこの力に従属したままであった。この時代の人々がわれわれにどれほど堂々たるものに見えようとも、彼らの一人ひとりとはがいに無差別である。マルクスの言うように、彼らにはまだ原生的な共同社会のへその緒がくっついている。³⁵

前半に書かれている、「没落する運命にあったこと」、「自然によって」「支配されている状態」で「……未発達な生産」であったことも事実である。どのような社会も一定の生産諸関係である限り、その生産力に応じて崩壊するのは当然であり、またその生産力は自然との相互関係に依存していることもまた史的唯物論の帰結点である。

しかし、現在の高度生産社会においても、まだ共同体国家の下で死刑制度が残存し、自然との間に温暖化問題という自然をも危機におとし入れるという太古の人々からすれば、異常ともいべき非人間的、反自然的なシステム、それも人間が人間を収奪、搾取し合うという弱肉強食の生態系のルールにも反する行為、集団活動、国家活動を許容しているのが実情であろう。なのに、後半部でたとえ太古の男性には、「個々人は、感情や、思考や行為の上で無条件にこの力（部族、氏族、つまり、ここでは女性原理、最小限の人間の再生産を確立する。人間（男女）共同社会の）に従属したまま」というのは、極めて形式的評価、木（男性も一部の）を見て森、つまり氏族共同体の長には男性も共同参加しており（今日の現存氏族＝母系共産社会ではむしろ大多数がそのような「政治」形態をとり、「母権制」でないという証左とすらなっている）当時の社会の全構成員の具体的目的、要求とその実現として、充分思考配慮されておらず、決して「考え抜かれ」熟考された総括的結論に至っていないのである。血族の連帯である限り、形態上、血縁関係を見れば罰せられようが、個々人は明

35 エンゲルス、『起源』、前掲書、100頁、S. 97

文化した就業規則も、刑法もない全く自由で同じ人間を育成しようとする平等観の発達した社会であったはずである。

宗教的限界はもちろんあるが、エンゲルスも認めているように、自然崇拜的な、シャーマニズム的な、いわば「子供らしい」それであって、現代から見てフォイエルバッハ流の唯物論的宗教（我と汝の愛の信仰）以上ではないだろう。

そして一層悪いことに、エンゲルスは最後部分で、そのような一面的解釈をマルクスに負わせて、先にカウツキーへの手紙で見せた、「新しい観点」を徹底的に、「考え抜き」、それまでの二人の共同作業、史的唯物論体系を全視野に入れながら、その「特別な重要性」を折出するまでには至らなかったといえよう。

このことは、『起源』執筆後、友人、ポール・ラファルグへの手紙でももらしていたように、そこでは、参照諸文献についてのエンゲルスの「推測」の正統性のみが語られていることは、一抹の危惧となるように思える。

「僕はこの題目にかんする文献を全部通読しなければなりませんでした。（これは内緒の話ですが、あの本を書いたとき、僕はそのことをやりませんでした—青年にありがちの生意気さからです）。そして僕が知っていたいへん驚いたのは、これらの未読の著書全部の内容が、ほぼ僕の推測どおりだったということです。—僕は過分に運がよかったです。」（「エンゲルスからポール・ラファルグへ、91年5月29日」）

では、モーガンらの発見した原始共産制社会の発見は、単に過去の存在の有無にとどまらず、マルクスの『資本論』等での歴史および思想にどのような重要な問題点をもたらすのか？

まず、母系制社会発見のもたらすマルクスの史的唯物論体系への内容についての意義、そして次に「女性原理」社会と「男性原理」社会という、新たな二重的な弁証法的歴史観の必要性、そして最後に、人類本史としての高次な「母系制共産主義を構築するための、「シャドウ・ワーク」の復権と資本主義的生産諸関係の変革との有機的統一による真に個性的な両性の人間関係の実現をめざす。

エンゲルスの『起源』がマルクスの体系を発展させよう意識していたにも

かわらず、モーガンの発見が、その体系に矛盾を生じさせないようにして、恣意的に微調整しているふしがある。

彼は、マルクスのモーガン著にたいする「摘要」から何度か引用しているが、かって共著で出版しようとした『ドイツ・イデオロギー』に言及しているところがある。「1846年にマルクスと私が古い未完の手稿のなかに、次のように書かれている」「最初の分業は子供を生むについての男女の分業である。³⁶」と。

だがそのような文言は見当たらない。ただ「……もともと、性行為における分業でしかなかった労働の分割が発生し、やがて、自然的素質（たとえば体力）、諸必要、さまざまな偶然等によって……³⁷」

このエンゲルスによる修正加筆よりも重要な問題は、史的唯物論事始めの、同居において、両人が人間の最初の「唯一」の歴史的社会形態として、「家族」を前提としていたことに一切触れていない、ということである。

「ここでそもそもはじめから歴史的発展へはいりこんでくる第三の事態は、彼ら自身の生活を日々新しくつくる場所の人間たちが他の人間をつくり、繁殖し始めるということと、一男と女、親と子の間柄、家族である³⁸」。しかも、二人は「未開人の場合、それぞれの家族がそれ独自の洞穴または小屋もっていることは、放牧民の場合に家族ごとに別々のテントがあるのと同様、自明のことである。この別々の家族経営は私的所有のいっそうの展開によって……³⁹」と注解を付していて、明解である。

エンゲルスは、当然彼らの家族出発説を否定して母系氏族説にかえて論ずべきであった。この点マルクスは、『古代社会』の「摘要」において、「最古のもの、無差別性交をともなう群れの生活、家族はない。ここでは母権だけがなんらかの役割を果たすことができる⁴⁰」と、概括的表現で承認していたのである。

しかし、マルクスの歴史観に一層重大な問題とその解決が、この最初の社会としての原始共産制社会の事実が、より新たに発生する。

36 『起源』、前掲書、70頁、S. 68

37 『ドイツ・イデオロギー』、マルクス＝エンゲルス全集、第3巻、前掲、27頁、S. 31

38 同上、24頁、S. 29

39 同上

40 マルクス、『全集』、前掲、補巻4、267頁

マルクスは、原資本論といわれる『経済学批判要綱』によく知られた人類史の三段階を弁証法的に展開した記述を残しているが、その仮定された第一段階は、原始共産制の形態に置き換えられなければならない。

「各個人は社会的な力を一つの物象の形態でもっている。この社会的な力を物象から奪いとってみよ。そうすると諸君は、それを諸人格のうえに立つ諸人格にあたえざるをえない。人格的な依存関係（最初はまったく自然的）は最初の社会的諸形態であり、……物象的依存のうえにきずかれた人格的独立性は第二の大きな形態であり、この形態において初めて一般的社会的物質代謝……の一つの体系が形成されるのである。諸個人の普遍的な発展のうえにきずかれた、……自由な個性性は、第三の段階である。第二段階は第三段階の諸条件をつくりだす。それゆえ、家父長的な状態も、古代の状態も（同じく封建的な状態）も、商業、奢侈、貨幣、交換価値の発展とともに衰退するが、……⁴¹」。

原始共産制社会を知りえなかったマルクスは、その欠落を具体的に想像力で補ない、一つの抽象的個人の見地から「人格的依存関係」を想定した。このような手法は『資本論』において、財産が労働時間に換算されるロビンソン物語としても叙述されている⁴²。アジア的上下関係を連想させる「諸人格の上に立つ諸人格」や偶然的な従者付遭難者は決して平等な母系社会に相当する関係を持たない（この点については今後の課題とする）。

今、ここで、第二段階の物象化された人格的独立性、家父長的狀態以降の資本主義社会をふくめて第二段階を、（第一段階を女性原理の時代と呼ぶとすれば）「男性原理」の社会と呼ぶことができよう。女性原理の否定である家父長制の発達した前半期と、剰余価値生産の資本主義社会の後半期とも男性支配社会であり、その（私的）所有にもとづく「取得」=収奪体制が男性原理であるが、その「物象的依存」ゆえに、自ら再生産し、具体的労働する女性原理（価値批判傾向）に再否定される。それはエンゲルスの言葉を借りれば、「母権制の転覆は女性の世界史的な敗北であった。男は家内でも舵をにぎった。女は、

41 マルクス著、資本論草稿集翻訳委員会訳、『資本論草稿集①1857-8年の経済学草稿、第一分冊』1981年、大月書店、138頁、S. 90~1

42 『資本論』、前掲書、102~3頁、S. 90~1

おとしめられ、隷属させられ、男の情欲の奴隷、たんなる子供を生む道具となった⁴³」と。そして先に見たエンゲルス『ドイツ・イデオロギー』でのマルクスの男女分業の見解の紹介のあとに、「今日私はこれにこうつけくわえることができる。歴史上に現れる最初の階級対立は個別婚における男女の敵対の発展と一致し、また最初の階級抑圧は男性による女性の抑圧と一致する⁴⁴」と結論している時代の原理的表現である。(おそらくこの結論が、エンゲルスにとっての「新しい観点」の全連環の中での「男性原理」という獲得物であったかも知れないが)。女性原理の「敗北」は育った自然的社会的環境からの切断により否定されることである。

当時の歴史的限界の中で、マルクスは、剰余価値生産の法則を弁証法的に解明するため、その前提と、その未来社会との相互関係を定式化しようと呻吟していた。そこで案出されたのが、先の三段階論であった。「資本と賃労働とが入る諸関係を所有関係または諸法則として表現するには、貨幣増殖過程における双方の側からの関わりを取得過程として表現しさえすればよい。たとえば、剰余労働が資本家の剰余価値として措定される……ブルジョア的法則のこの第二法則は、第一法則が転回してなったものであり、……第一法則とは、労働と所有の同一性であり……⁴⁵」云々と。

だが、第一法則の「労働と所有の同一性」はヘーゲルの「占有」から「所有」への法哲学に媒介・災いされてか、女性を中心とした共同所有、(家族)所有なき労働として統一的に明確にならず、当時の基本的事象アジアの生産様式(これ自体、原始共産制説も多いが、日本史でも明らかになったように「総体的奴隷制」ともされたように、議論があった)と結びつけて、共同所有と家族ないしは個人占有ないしは所有との二重性、悪くいえば「矛盾」の中で辛苦する。マルクスの歴史的・人間的出発点は、人間集団でなく抽象的個人、労働者としてのみ現れ、まして具体的社会つまり人間の再生産を中心とした女性(および男性)共同社会を知るよしもなく、男性支配の所有の「様態」、接し方、運動

43 『起源』、前掲書、62頁、S. 61

44 同上、70頁、S. 68

45 『要綱』前掲書、115頁、S. 377

の中で、それらの共同性が対立の統一において把握されるままにある。

「……東洋的共同体にもとづく共同的な土地所有……の形態においても労働者は、自分の労働の客体的諸条件にたいして、自分の所有物にたいする様態がかかわるのであって、これこそ、労働と物象的諸前提との自然的統一である。……そしてこの前提が、共同体組織に由来するものとして措定されているか、それとも共同体を構成する個々の家族に由来するものとして措定されているかによって、個人は他の諸個人にたいして、共同所有者、すなわちその数だけの共同所有の分身にたいする様態で関わるか、または、彼と並ぶ自立した所有者すなわち自立した私的所有者にたいする様態で関わるのである。⁴⁶」

詳論はできないが、マルクスが、人間の再生産を理解していたにもかかわらず、女性原理を解明しえなかったのは、男性原理の所有概念の限定をこえることができなかったことにもよろう。

彼にあっては、「生産の（あるいは同じことだが、男女両性の自然的過程的によって増進する人口の再生産の、一というのは、この再生産は一方では主体が客体を取得することとして現れ、他方ではまた、主体の目的のために客体を形成し従属させることとして、客体を主体の活動の成果かつ保存者に転化させることとして現れるのだから）本源的諸条件はもともと、それ自身生産されたもの、つまり生産の結果ではありえない⁴⁷」と、人間のそして社会の生産の基礎的両面を前提であり、結果でないと切り捨てている。

だが、ここでもまだ、子供を‘取得’するという所有概念が働き、その母親の連帯による‘形成’‘共働’という女性原理の理解が不十分（おそらく、男性の家父長制的認識が強固すぎるため）である。

結論的にいえば、マルクスの視座が、まだ男性原理、所有原理、上述における‘取得過程’としてしか、人間の相互関係を否定的に（つまり 同時、肯定的人間関係を知らない）しか把握できていなかったことによる。

46 『要綱』前掲書、17～8頁、S. 37

47 同上、140頁、S. 393

(4) シャドウ・ワークの復権をめざして
 ——女性原理による男性原理の摂取（自然的男女分業の止揚）

ともあれ、これまでのモーガンの母系社会の発見は、とりわけその未来社会への展望について、新しい理論的、実践的發展の基礎となる。

『資本論』の革命論とは、「資本主義的生産様式からうまれる資本主義的取得様式は、したがってまた資本主義的私有も、自分の労働にもとづく個人的（というより男性的—武井）な私有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす。それは否定の否定である。この否定は、私有を再建しはしないが、しかし、資本主義時代の成果を基礎とする個人的（つまり男女両性的—武井）所有をつくりだす。すなわち、協業と土地の共有と労働そのものによって生産される生産手段の共有とを基礎とする個人的所有（そして、高次な母権制共産主義社会—武井）をつくりだすのである。……前には少数の横領者による民衆の（つまり家父長的家族—武井）の収奪が行われたのであるが、今度は民衆に（つまり、女性と連帯する男性達—武井）による少数の横領者の収奪が行われる。⁴⁸」

本稿の後半の理論的部分の冒頭近くで見たように若きマルクスは、その人間がどのような人物であるかを女性との接し方についてどうであるかにより、判断できると洞察した。またエンゲルスも『起源』において、物象化社会における家父長制をめぐる男女の階級闘争が、ブルジョア階級に対するプロレタリア階級と同一性をもつことを承認した。つまり二種類、二重の階級闘争に分裂した。

そしてまた、第二期初期の男女の家族内「階級闘争」は今日もまたより深刻かつ大規模に続いている。その中で、母を中心とした女性達は、かつて築き上げた「原始母系社会」を再びより一層高度な文明の下で実現しようと、何千年以上も日常生活の中で、女性原理、「生活の共産主義」、男性と闘い苦勞を共にし、子供を生み、育てることを実践するなかで社会を変革しようともうひとつ

48 『資本論』前掲書、995頁、S. 791

の階級闘争にも努力してきた。今や男性プロレタリアートはさまざまな女性原理の運動を正面にすえ、常に女性と共に連帯、議論、行動できなければプロレタリア階級の階級自体を止揚する階級闘争の一步の前進もありえない。つまり、女性環境の保護、母胎安全（出産前後）育児・教育に全面的に協力し、家族内「自然的分業」を社会的に意識的に克服、平等関係を実現していくのである。

「晩年期のマルクス」つまりモーガンを始め古代社会の研究を続けていた1880年前後のマルクスが革命前のロシアにおける村落共同体の存在に注目して、単に私有の家父長的自営形態から大企業の大規模な剰余価値搾取の道とは別に「ロシアの農民の場合には、これとは反対に、共有が私有に転化」（「マルクスからザスーリチへ、1881年3月8日」『資本論』にかんする手紙、下⁴⁹）と示唆したように、既に資本主義体制に転化後においてもまた、家族における「プロレタリア家族」を中心とした「日常生活の共産主義的家事育児労働」の女性原理を、再び陽のあたる社会変革の道に「否定の否定」として課題にできないだろうか？ シャドウ・ワークの復権として。

この道は北欧などの福祉社会へという社会民主党などの「第三の道」と同じ軌道をとるように見えるかも知れないが、その後に女性原理を活動軸として資本主義（家父長的）「男性原理」との対決、資本主義的生産様式を男女平等な「民衆」、多数派形成の発展と共に止揚していく路線である。

もしそうであるなら、エンゲルスの主張する強力な男性原理の社会の革命後の家族変革の方向ではなく、全く逆の変革の道こそ、つまり女性原理による家族変革を優先しながらあるいは共同、共調、連帯、交流しながらの共産主義的解決過程を進む。私流に読みかえると、「だから、女の地位はいずれにしても大きく変化する。しかし、男の地位、すべての男の地位も、いちじるしい変動をこうむる。個別家族は生産手段が共同所有に移るとともに社会の経済的単位ではなくなる。私的な大企業は社会的産業に転化する。子どもを養い育てることは公務となる。⁵⁰」となる。

シャドウ・ワーク復権は、女性による（男性プロレタリアートの支援のもと）

49 岡崎次郎、1960年、大月書店、298頁

50 『起源』前掲書、80頁、S. 77 傍点部分を転倒させて

政治的多数派構成をめざすと同時に、生み育てる女性原理に対する「社会賃金」（いわゆるベーシック・インカム）の要求を意味する（山本亮著『ベーシック・インカム入門』2009年、光文社、87頁）。幾百年かかろうと。

次の事をつけ加えておきたい。

エンゲルスに関して、内輪の話を持ちだし、彼が「第一バイオリン」の弾き手となった家族論での業績についてふれないのは、一面的だという非難をまぬがれないであろう。

既に見たように彼は家族が、「男と女」が「文明社会の細胞形態」であり、近代社会の唯一の「構成分子」であり、その内部では「最初の階級対立」が「今日までもつづいて」おり、「なくす必要がある」「生産諸関係」「社会の経済単位⁵¹」であるとした。この人間の再生産という見地から、マルクスの史的唯物論からの階級闘争史観を一步前進させ、物象的社会の生産と消滅における社会的＝公的活動の搾取関係および家族的＝私的活動の差別関係という内外二重の階級関係を提起したのである。

しかし、本稿で論及したように、後者の、家族における女性原理、人間の「再生産」育成の普遍的意義とマルクスのブルジョア社会の社会変革の意義とを充分考察、統一的に関連化せず、（歴史的順序化ないしは「相対化」し）二次的な意義、役割に至少化してしまった。

「産業の世界では、資本家階級の法律上の特殊な特権がみな廃止されて、両階級の完全な法律上の特殊な性格が完全に明確に現れてくるのである。」(同上)

さらにエンゲルスがプロレタリア家族について次のように定義しようとする時、現代の家族の崩壊現象からいかに遠く隔たっているかあるいは裏返しの証左となろう。彼の家族論は、男女関係、性愛、ヘテリズム（「売春」形態）としての側面でしか考察されず、労働や分業による商品生産に止まらずさらに進んで人間の身体的、精神的「再生産」活動として熟考されていないのである。

「だから、プロレタリアの家族は、もはや厳密な意味での一夫一婦家族ではない。たとえ双方の側にこのうえなく熱烈な愛とこの上なく堅固な信実とがあっても、また、宗教的および世俗的なあらゆる祝福がこれにあたえられたと

51 同上、78頁、S. 76

してさえ、そうではない。⁵²」

とはいえ、以上のような指摘は現代において可能になったのであり、100年以上も前のエンゲルスには、正当な洞察だったといえよう。(少なくとも、彼は『資本論』末尾の三階級論を書き直すべきだった?)

最後に、冒頭の問題提起にもどって、現代におけるとりわけ経済システム、資本制社会における家族、企業社会における家族の経済主体としての役割を総合的に述べておく。

まず、家族を女性原理を核とした子孫の育成の最も古くまた深い階級闘争の場と考えると女兒から母親となり、やがてその子供が成人して孫が二人以上育成した場合のみ、その経済社会の再生産が維持されるという、3世代60年から80年にわたる長期の弁証法的発達段階を展開する家族形態が必然的とならねばならない。この内在的展開が外在的なるブルジョア階級支配の搾取攻撃の下で可能かどうかである。

次に、特に戦後の世界的「国家独占資本主義」時代に至って(帝国主義戦争への「国民」総動員を経て)、労働者階級および女性階級の闘争の成果として政治的参加のための両性選挙権が獲得され、新たな「民主的」同時に「女性的」制度改革を実現していった。

日米らにおけるケインズ流有功需要雇用政策による「修正」資本主義であり、北欧らの男女「平等」的福祉政策による「第三の道」などである。

戦争等による不完全な経済発達に終わっている国家もあるが、日本に象徴的なように、国内におけるプロレタリアおよびフェミニスト階級の一定の成長により、三世代の国家的総括を可能とする状態となった(資本制上部構造とジェンダー的階級闘争との相互作用)。

この女性原理を軸とした三世代経済発展の視角は、単なる人口成長論アプローチに止まらず、一層、総合的かつ長期的経済循環論アプローチとなろう。少なくとも、マルクスのいった「第二章」「社会の消費力⁵³」の中核部分の解明とその経済的社会的機能の導出に有効となろう。

52 同上、76頁、S. 74

53 『資本論』第3巻Ⅲa、資本論翻訳委員会訳 S. 254、新日本出版社

「女性改革が未完であるとすれば、それは女性のライフスタイルが、『男性化』したほど男性のライフスタイルが『女性化』していないからである。… 稼ぐための営利活動と、家庭における家事、育児という夫婦間の分業体制は、女性が働き、男性が家事、育児にかなりの時間を費やすことによりバランスがとれてきた。こうした傾向には著しいものがあるが、革命的とまではいえない。まず家事、育児に関する男女間の隔たりは、依然として大きい。⁵⁴」

社会民主党的第三の道をゆくデンマークのアンデルセンのすばらしい分析にもかかわらず、将来社会への明確な発展には未だいたっていないのは何故だろうか？

アンデルセンには、女性のシャドウ・ワークの人類史的、積極的な高次労働（男性の発明品である利潤＝剰余価値追求の企業活動に対しての）への理解と、資本制社会システムへの批判的見地がここでは、希薄である。男女平等な分業体制を制度化する「傾向」に期待しているにすぎない。

確かに、ノルウェーで企業女性経営職への40%義務制にあらわれているように、男女平等化、その制度化は、民主的であり同時に社会化への歩みである。だが、まさにそのような主体的社会化自体「社会主義」本来の活動であり、そのような具体的解決形態の創設は、共産主義運動そのものへのプロセスでもあるということである。（それは、マクロ経済的土台における最重要な労働主体のマイクロニーズに照応した新しい「上部構造」への反映的創造活動である）。故に、女性原理を資本制批判さらに共産主義的「復権」へと展望、発展・連続するという必然性の洞察が不可欠である。

男性は女性原理のリアルで繊細な具体的解決活動を基礎にしてはじめて自らの空想的、論理的な個性をいっそう発展させられるのであり、逆に女性も男性の抽象的、長期的長所を批判的に採り入れ、「男性化」「女性化」の現象の中に、真の両性の個性を開化させていく「自由の王国」創造が可能となろう。かつて「弁証法、論理学および認識論の三者の同一性」という哲学論争が「マルクス・レーニン主義者」の間で行われ未解決のままに残っているが、本来唯物論的認識論を内包する女性原理と、観念論的になりがちな抽象的論理学を継承してき

54 G, エスピン＝アンデルセン『福祉を語る』京極他訳、2008年

た男性原理と、その両原理の「あるべき未来」の弁証法、の統一的「人間原理」とは、その具体的歴史的創造過程においては、三契機が全く同一面の異段階の様態だ、と表現することもできよう。

付 記

もともと本稿は、経済理論学会第58回大会分科会での報告をもとに改稿したものである。

同分科会で、石倉雅男氏（一橋大学）から、小論の論旨を明瞭に把握され、評価されたうえで、次のような有意義なコメントをいただいた。

「武井氏の視点からすれば、「シャドウ・ワークの復権」を実現するために、どのような政策的措置を提案することができるのかを、ぜひ知りたいところである。特に武井氏の論文では「子どもを養育することが公務となる」という視点にも注目されているが、この観点は、現在「少子化対策」として提起されている政府による「子育て支援」（児童手当、教育補助等）の考え方や、「子どもは公共財である」という考え方との根本的な異同についても、できれば説明していただきたい。」（石倉雅男「武井博之氏の報告「現代日本における「シャドウ・ワーク」の復権——『資本論』等における変革立体形成の探求——」へのコメント）

同日小生は、女性原理を基礎とした所得保障としてのB I（ベイシック・インカム）の重要性に注目するのみで、一連の養育政策については及ばなかった。

子を生む母の生活が保障されなくして、社会（男性？）がとやかくいう資格はないし、むしろB Iの内に家内労働の必要経費として、種々の子育てオプションが充実されるのが筋であろう。

とても「根本的な異同」にはゆかないが、次のように考える。

現代日本の福祉政策における「少子化対策」「子育て支援」なるものは、基本的には、石倉氏が指摘されたように、子供を「公共財」とみなし、家族の紐帯を解体させ、物象化する資本主義生産様式のかつてケインズ政策がそうで

あったように、一時しのぎのしかも民営化される二重の疎外形態にすぎない。

本稿で述べたように、三世代家族の真の完成のためには、その根幹をなす女性原理の貫徹につながる総合的社会政策の実現をめざさなくてはならない。

女性の自立を促進する家事労働の社会化つまりBIの確立を基軸とし、企業社会における男性原理の帰結である自由時間の拡張と結合させて、子供の発達のため生物的・社会的環境の充実と活用を共同で実践していくことである。

もちろん、その具体的な政策が、どのような形態をとるかは、各国の社会状況によるが、日本においても、一般的には、両親の遺伝子情報等や個性の結晶たる後継者をどこまで家族が、どこから社会が義務を果たしていくかを可能なかぎりその子の「必要に応じ」て自由につまり負担なく選択することである、ということである。

幼青少年にとって、環境と教育の場の新創造が肝要である。

人類社会の最初の共同社会が「原始母系社会」であったように、現代の人類は、社会と結びついた自覚的家族つまり共産主義的教育と環境の場を、新しい「再生産」者に提供できるかどうかには到達しつつある（個体家族発生は系統社会発生を反覆する）。

要 約

若者の少子化と、高齢者の死亡による総人口の絶対的減少は、日本経済の未来への希望に暗雲をもたらしている。というより絶望の淵に立たされているといっても過言ではない。

特に、1990年代からの社会主義体制の崩壊後の新自由主義政策による非正規雇用形態の、急速な拡大は、今後の産業構造および国民経済に深刻な亀裂を生じさせている。

しかもホームレスや、独居老人は言うまでもなく、乳児から寝たきり高齢者まで、少数者をのぞき大多数の国民は身体的にも精神的にもそして何よりも経済的に、満身創痍の状態に陥っている。

この崩壊直前の日本国民を支えているのが、団塊の世代を生きてきた母親である。育児から介護を含む家事労働をこなしつつパートとしても稼ぎ手である女性とは、マルクス経済学にとっていかなる意味をもつのか。

まずエンゲルスの『起源』における原始母系共産社会（「女性原理」の社会として）の「発見」を手がかりにして、マルクスの『経哲手稿』における抽象的人間観、『要綱』における共同所有と家族との矛盾的「統一」さらに『資本論』における「商品」経済（あるいは、『要綱』での「物象的依存関係」社会）の弁証法的発展法則（自営業の否定としての資本主義的独占と、その否定の否定としてのプロレタリアートによる革命）の変革主体の限定性等を指摘する。

そして、その解明の中で、何万年にわたる最初の社会の生み育てる女性原理の重要性を確認する一方で、彼らの『資本論』の革命論は基本的に物象化する「男性原理」の世界で展開されていた限界が明らかになる。『要綱』における女性原理の唯物弁証法的発展と『資本論』における男性原理の内的弁証法との二系列の発展法則の成立である。マルクスらの階級社会とその発達形態である資本主義社会の解明自体は完全な弁証法的（人類）歴史像（母系共同社会—物象的社会—高次母権制社会）の形成が可能となる。

その時、現代日本社会、いや世界の国々の地球的共産主義社会の可能性、とりわけ女性の社会変革への主体的参加の理論的、実践的展望が大きく開かれるにちがいないし、また、実際の現実世界は、当時のマルクス視野の歴史的限界をはるかに超えているといえる。

なぜなら、本稿でいう女性原理社会を土台とした男性原理（社会）の弁証法的着地点が、マルクスの（男性社会における）資本主義変革と重なり、男女の自然的分業を「社会的」に止揚する世界主義社会へと視野を拡張するからである。それは単に欧州等における男女協働参画という抽象的、機械的平等にとどまらず、女性主導の家族ならびに社会の変革をめざすからである。

（以下次号）

